VE!LIVE!EXシナリオ-BULETT OF CRISIS-ANOTHER EDITION

伝説・改

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
けいおん！　ＬＯＶＥ！ＬＯＶＥ！ＬＩＶＥ！ＥＸシナリオ－ＢＵＬＥＴＴ　ＯＦ　ＣＲＩＳＩＳ－ＡＮＯＴＨＥＲ　ＥＤＩＴＩＯＮ

【Ｎコード】
Ｎ０８８９Ｗ

【作者名】
伝説・改

【あらすじ】
軽音楽部のひとり、日暮遼祐。
彼が目を覚ますとそこは崩壊した街だった。
自らに振りかかる謎を解き明かす事により、驚愕の真実が明らかになる……。
本作は、同作者が公開していたけいおん！　ＬＯＶＥ！ＬＯＶＥ！ＬＩＶＥ！ＥＸシナリオ－ＢＵＬＥＴＴ　ＯＦ　ＣＲＩＳＩＳ－の再構成版となっています。

Chapter1－1「覚醒－Awakening－」

カプセルの中。

薄い翠色の液体に、――は浮かんでいた。

目をうっすら開けると、――を――た――がいた。

しかし、カプセルの中の――はその人物を知らなかった。

「……ダ……レ……？」

「……助けてあげて。今度こそ」

助ける？

何を？

分からなかった。――は。

そして再び、――の瞼はゆっくりと落ちていった。

「……！」

目覚めると、俺は暗闇の世界をさまよっていた。室内用に貼られた床の感触。
……って待て。なんで床で寝てるんだ？俺は昨日、柔らかいベッドの上で寝たんだぞ。
それに……なんで暗いんだ？もう朝だろ？あ、今は夜中なのか。
まあいいか。眠いからもうちょっと寝ようっと……

「って寝れるかぁぁぁぁ！！」

勢いよく飛び起き、辺りを見渡す。
そこは、俺がいつも寝ている自室の中。
にしてもなんで床で寝てんだ？しかも制服で……。
昨日、寝るまでの行動を思い出す。
……が。

「あれ……？」

変だな……。
昨日、俺は本当に家に帰ったか？
ベッドで寝たのか？
……ダメだ、思い出せない。
待て待て、名前は覚えてるぞ？
日暮遼祐。桜高、３年２組。軽音部所属で……。
とりあえず、自分の情報については分かる。周辺の友人や知人など、基本的な事は覚えていた。
しかし、昨日までの事が思いだせなかった。
頭を振ったり、ついには壁にぶつけて思い出させようと考えたがそれはまずいのでやめておいた。
とりあえず部屋から出て、一応家から出る。

……そして、おかしな光景が目の前に広がっていた。

「なんだよ……これ……！？」

倒壊したビル。

ちらほらとのぼる煙。

燃え盛る炎。

崩壊した世界――街が、そこにあった。

「どう、なってんだ……？

訳が分からなかった。
まさか地震でもあったのか？
にしては人もいないし、自衛隊も警察もいない。
とりあえずマンションから出て、街を歩いていた俺は目の前の光景が理解できなかった。
そして一番意味が分からなかったのは……。

「！！」

目の前にあった人間の遺体。
見た瞬間に、ものすごい不快感に襲われるが吐き気は襲ってこなかった。
……むしろ、慣れている。そんな感じだった。

どういう意味だよ……、遺体を見るのが慣れてるとか……。

「……くそ」

本当に、訳が分からなかった。
とりあえず、俺はこれからどうすればいい？
携帯は圏外。固定電話も繋がらない。公衆電話も壊されていて。
なんと言っても、生きている人間に会えなかった。

「まさか俺……世界でたったひとりとか？」

んな訳バカな話、あるかよ……。
これは夢だ。夢なんだよ。
でも、この街の姿を見た時にあまりの衝撃で尻もちをついた時に受けたあの衝撃や痛み。
あの時はそれよりびっくりした事があったので何も感じなかったが、もしこれが夢なら、あの時に覚めていたはずだ。
……どう、なってんだよ本当に。
と、俺はふと足を止める。
物音がした。後ろから。
まさか、人間？
俺はそう思い、後ろを振り向く。

「……な、なんだよこれ……！？」

目の前に現れたのは、人間ではなかった。

緑色の姿をした、カエルの様な怪物。
気持ちが悪かった。
俺は、すぐさまその場から逃げた。
走った。走ったんだ。
そして俺はいつのまにか桜高の校庭にたどり着いていた。
「はあ……はあ……」
息を整え、後ろを振り向く。
いなかった。まけたか……良かった。
にしても、なんだったんだあの怪物……？
俺はそんな事を思いながら、とりあえず桜高の校舎に入ろうとする。
……その瞬間だった。

「キィエアアアアアアアアア！」

金切声。
それが聞こえたと同時に、目の前にあいつが降りてきた。あの気持ち悪い怪物が。
「な、なんで……！？」

そして、後ろにもまいたかと思った怪物がいた。
囲まれた。

「……なんだよ、なんなんだよお前ら！！」

分かんねえ……。
なんで俺が、俺がこんな目に……！？
いきなり街が壊れてたと思ったら、人間の遺体に遭遇して、今度は怪物……！？
ふざけるのも大概にしろよ……！！

「こんな所で、死んでたまるかよ……！」

俺は考える。必死に。
何か、何か武器みたいなもんねえのかよ！？
ポケットを必死に探るが、何もなし。
その瞬間、前方にいた怪物がふたたび金切声をあげて飛びかかってくる。

「うわああ！！」

横に回転し、回避する。
囲まれるという状況ではなくなったが、どの道危険な状態であることに変わりなかった。
俺は腰のポケットを手探る。
……と、腰に固い、鉄の感触が。

「なんだよ、これ……？」

指でなぞると、なんとなく形が分かった。
引き抜くと、俺の手には銀色の形をした拳銃――L・A・Rグリズリーが握られていた。

「銃……？なんでこんなもん――ッ！」

銃に気を取られていたせいで、怪物が襲いかかってくるのに気づかなかった。
急いで回避しようとするが、わずかに間に合わず、怪物の鋭い爪が俺の左肩に突き刺さる。

「がぁ……！」

爪をさらに奥深くまで突きさしてくる怪物。
俺は一瞬、意識が飛びそうになったがなんとか保ちながら怪物の腹へと拳銃を構える。

「この……っ、野郎！！」

引き金（トリガー）を引くと、銃独特の発射音が響き、同時に怪物の悲鳴も聞こえる。
だが、尚も離れようとしない怪物の腹に蹴りを食らわす。
肩に突き刺さっている爪が勢いよく抜き、激痛が走るが耐える。
さっき銃を撃った方の怪物は、完全に死んだようだ。
だが問題は、もう片方の怪物。
さあ、俺の腕で倒せる？
……ほとんど、無理だろうな。
だがやらなきゃ死ぬ。
俺は怪物に照準を合わせ、引き金を引く。
銃口から飛び出した弾丸は、怪物に……当たらなかった。

とにかく当たるまで討ち続けようともう一発撃つ。
しかし偶然なのか、頭にその弾丸は直撃し、撃たれた箇所から血を吹きだしながら倒れる。

「はあ、はあ……」

痛む左肩を押さえながら、息を整える。
なんだ、なんなんだこいつら……？
しかも、なんで俺は銃なんて持ってる？第一、なんで撃てる？
本物の銃って反動が凄いんじゃないのか……？
何がどうなのか、分からないが俺は学校の校舎に入ろうとする……。
その瞬間。

「動くな！」

……。
靴箱の方を見ると、そこには多数の銃を構えた人間。
真ん中にいるあの女の子が多分声を出したんだろう。
……いや、待て。あの声、聞き覚えあるぞ……？
そして、その姿にも見覚えがある。
あのツインテール。小柄な体。

「……梓！？」

「りょ、遼祐、先輩……？」

間違いなかった。
中野梓。俺の後輩で、軽音部の部員。

とりあえず拘束されて、俺は教室に連れて行かれた。
いくら仲間とは言え、用心しなければやられると思ったんだろう。
信用ねえな。
だが、一応負傷した左肩は治療してもらった。
椅子に座らされ、教室の中は梓と、もうひとり同い年ぐらいの男、
そして俺の三人だけだった。

「……名前は？」

「日暮遼祐」

梓、お前俺の名前忘れたの？

「……なんで、なんで……？」

そこまで俺の存在否定したいか。
どんだけ嫌いになったんだよ。

「……そうじゃ、ないです」

「じゃあなんだよ、むしろ興奮でもしたか？」

「なっ、そんな訳ないです！」

……梓だこいつ。
間違えない。
「あの、日暮さん……でしたよね？」
おお、忘れてた。
教室の中にいた、もうひとりの男が俺に声をかける。
「俺、春藤翔って言います。翔でいいです」
「……で、翔。なんだ？あと日暮じゃなくて遼祐でいいから」
「分かりました。じゃあ、遼祐さん。あなたは、今までいったいどこに？」
どこにって……。
そりゃまあ、家？
「まさか……。あの家はほとんど壊れてた。人が住んでた形跡もないし」
「んな訳あるか。確かに他はほとんど壊れてたけど、俺の部屋は……」
「そんな訳ないです。私達は、実際あそこにいったんですから」
……いつ？
「……11か月ぐらい前でしょうか」

はあ？
ちょっと待て。１１か月前？
アホ言うな。半年っつーと……とりあえずこんな事になってないだろ。
平和すぎてここが地獄に見えるぐらい。
……いや、地獄なんだろうけどさ。

「……ありえないです。だって、この世界がこんな事になったのは、一年前なんですよ？」

「お前、映画の観すぎだ。１年前？そん時の俺はピンピンしてたぜ」

「……嘘です。だって、先輩は……」

梓が口ごもり、再び何かを喋ろうとした時だった。
突如教室のドアが開き、誰かが入ってくる。

「英樹さん……」

英樹と呼ばれた男は、梓に名前を呼ばれてそっちを向く。
何やら2秒ほど見つめ合うと、梓は翔を連れて教室を後にした。
アイコンタクトか？
やがて、教室に二人だけになると俺は英樹と呼ばれた男を見据える。

「……日暮遼祐、だったな？」

年上……だな、どう見ても。
いかんいかん。あんま刺激せん方がええようだ。

「ええ。あなたは？」

「灘宮英樹だ。この戦線の副リーダーをしている」
「戦線？副リーダー？」
いよいよ頭がこんがらがって来たぞ。
戦線って……戦争でもしてるつもりですかこの人。
「……強ち、間違っては無いだろうな」
「……どういう意味ですか」
「お前も観たはずだ。あの怪物を」
そう言われ、俺は校庭で戦ったあのカエルの様な怪物を思い出す。
思いだすだけで、あのグロテスクな外見に一瞬吐き気を覚えるがあれが……。
……待てよ。まさか。それなら俺の事以外は話は繋がる。
「つまり、あんたや梓達戦線は、この街……いや、世界って言ってたな。
この世界をこんなのにした怪物たちと戦ってる……って事ですよね？」
「そういう事だ。
……だが、何故お前はそれを知らないんだ？」
「……だって、昨日まで俺は普通に高校生してたんですよ？知るわけないじゃないですか」

そう、ここ。
何故俺はこの事態を知らない。
いや、記憶にない。そう言った方がもう正しいのかもしれない。
「……まあいい。とりあえず、リーダーがお前に会いたがっている。いっしょに来てもらう」
「……うっす」
椅子に付けた拘束器具を外してもらい、英樹さんと共に戦線の隊長とやらに会う事に。
ふと、俺は窓から街を見る。
酷いありさまだ。いつ見ても。
やがて階段を上がり、俺は見覚えのある部屋へとたどり着いた。
「ここって……？」
音楽準備室。
間違えない、ここは俺たち軽音部の……。
――軽音部へようこそ！
「唯、入るぞ」
……え？今、この人なんっつった？
唯？……おい、まさか。

英樹さんはドアノブを回し、ドアをゆっくり開ける。
そして中にいた、ひとりの少女。
……あの後ろ姿。間違えなかった。

「……唯」

俺は無意識の内に、その少女に歩み寄る。
なんだ、なんだこの感じ。
何年も会ってなかった。でも、つい最近会ったような、この感じ。
そして、少女は俺の方を振り向く。

「……りょう、くん……」

「唯……」

俺の顔を見た唯は、驚きを隠せないでいた。
まるで、なんで生きてるのみたいな。そんな顔だった。
そいやあ、梓にも同じ様な反応されたな……。

「……本当に、りょうくんなんだよね？」

「どう間違えるんだよ。俺みたいなイケメン」

「りょう、くんだ……」

……で、なんでそんなに驚くんだよ。

傍に寄ってきた唯の頭を撫でてやりながら、そう言う。

「……だって、りょうくんは――」

「唯先輩！大変です！！」

突如、ドアの方から梓が声を張りながら飛び出してくる。
何かと思い、梓の方を見ると肩で息をしていた。横には、翔の姿もあった。

「クリーチャーが来ました！」

「……分かった。りょうくん、後でね」

その瞬間、あいつの顔つきが変わった気がする。
なんだ、今の顔……？
一回も見た事がない、唯の顔だった。
俺はそれを見た瞬間、何か心に引っかかるものを覚えながら、唯の後に続こうとする。
が。

「りょうくんは、ここにいて」

「え？なんかあったんだろ。だったら俺も……」

「ダメ！絶対に、ここから動かないで！」

……なんだ、どうしたんだ？

「……わ、分かった」

唯に押されるまま、結局俺はひとり部室で待つ事にした。
ドアが閉まり、鍵も掛けられ、俺は完全に閉じ込められた。
……なんだ。なんであいつは俺をここに残した……？
不思議に思いながら、俺は外を見る。
そして、ようやく梓の言った大変な事の意味が理解できた。

「……おいおい、なんだよあれ……？」

校庭にいたのは、大量の怪物の行列。
いや、行列なんてもんじゃない。もう、とにかくヤバかった。

「まさか、あいつら、いっつもこんなのと……！？」

そんな……。
なんで、あいつらが戦うんだよ。
というより、なんなんだ。
何が、どうなってる。

俺の身に何が起こってる？

この世界に何が起こった？

状況が理解できない俺は、ただ茫然と、怪物たちの大群を見つめる

事しかできなかった。

Chapter1－2「決意－Decision－」（前書き）

ＯＰテーマ『二人三脚』歌：ｍｉｓｏｎｏ
ゲーム『テイルズオブシンフォニア－ラタトスクの騎士－』オープニングテーマ

Chapter1－2「決意－Decision－」

茫然と外に広がる光景を見ていると、入口のドアが開く音が。
すぐさま腰に刺していた銃を構える。が、そこにいたのは初めて見る男の姿だった。
無愛想な感じで、俺と同い年っぽかった。

「……日暮遼祐、だったな？」

「あ、ああ……」

その手に持ってあった、マシンガン――ＵＺＩにマガジンを装填し、
俺にゆっくり歩んでくる。
なんだ……？こいつのこの雰囲気……？
殺気……？いや違う。
分からないまま、その男はゆっくりを俺に近づいてくる。
第一、味方か敵かすらわからない。引き金に指を置くが、俺の二歩
前まで来ると立ち止まった。

「……んな所で何やってんだお前」

殺す気は……多分ないようだ。
銃を降ろして、腰にしまう。

「こんな所でボーっとしてるぐれえなら、手伝え」

ムカ。

「お前らのリーダーにここにいろって言われたんだ」

「唯が？あいつ、何考えてんだ……」

リーダーにため口かよ。
それはさておき、とりあえず外の状況を聞く事にしようと口を開き
かけるが、何かを感じ取る。

「……おい」

「……気がついたか」

部屋の外。
何かがゆっくり歩いてくるような、そんな感じがした。
俺たちはドアの左右にスタンバイして、再び拳銃を手に持つ。

「怪物か……？」

「多分な。……お前、名前は？」

「今言わないといけない事かよ」

「名前聞かねえと何かと不便だろうが」

「ちっ。……瀬光紅だ」

口元に笑みを浮かべながら頷くと、再び意識をドアの外へ。
ゆっくりと、こちらに近づいていた。そろそろ到着するだろう。
マガジンの残弾を確認する。
と、そこである事に気がついた。

「弾が……入ってる？」

おかしい。
確か、校庭で俺は怪物に向けて2発撃ったはずだ。
なのにこの銃の弾は、減っていなかった。
どういうことだ……？

「おい、そろそろ来るぞ」

「ああ……」

足音が近づく。
やがて、その音が止む。
……近くだ。ドアの前。
俺たちの緊張感が一層高まり、グリップを握る力が更に強くなる。
――そして。

「キェアアアアアアアア！！」

金切声と共に、怪物はドアを蹴飛ばして部屋へと進入してきた。
俺たちは同時に銃を構えて、一斉射撃。
体中から血しぶきが走り、発砲をやめると同時に怪物は倒れる。

「……一体、か？」

「だな」

後ろを振り返るが、見た所他の怪物の姿は無い。
一息つき、銃を降ろす。

「……とりあえず、通信室へ行くぞ。状況を確認したいからな」

「分かった」

唯に止められているが、流石にここはこいつに従うべきだ。
瀬光紅に連れられて、俺たちは通信室へ向かった。

通信室と呼ばれた教室では、この戦線の隊員たちがあわただしい様子を見せていた。
その中のオペレーターに、俺たちは近づく。

「状況は？」

そう聞くと、オペレーターはこちらを振り向く。

「瀬光紅さん、それと……」

「日暮遼祐だ。事情があって保護されてる」

「……分かりました。現在、怪物たちは唯隊長たちと交戦中。何体かは校舎へと入りこんでいますが、現在はほとんどいないと思われます」

さっき倒したのが、その中の一体か。

「英樹さんや翔も？」

「ええ。現在、唯隊長と梓さん、灘宮副隊長と春藤さんに別れて迎撃に当たってます」

「分かった。……日暮、お前はどうすんだ」

「……そうだなあ」

さて、どうしたものか。
唯には動くなと呼ばれているが、流石にこんな状況だ。人手は多い方がいいだろう。
……でも、なんで唯は俺に動くななんて言ったんだ？
こんな状況なのに、戦力になるはずの俺を。

「……とりあえず、お前に着いて行く」

「分かった。着いて来い。……足手まといになんじゃねえぞ」

ムカ。

「そりゃこっちのセリフだ」

「ちっ……。来い」

舌打ちして、不機嫌そうな瀬光紅だったがすぐに切り替えて、俺たちは通信室を後にした。

裏口から出ると、金網を今にも昇ってきそうな怪物たちの姿があった。
二人でその怪物たちを掃射して、さっさと表へ出る。
……そして俺は、何故か知らないがこの光景に既視感を感じた。
なんだこれ……。なんだか、何度も何度も。こんな光景を目にしたような感じがする。
この銃を撃つ感触、怪物が倒れていく姿。

「くそっ！」

分からない。
なんなんだこれは……！？
これが、デジャヴって奴か？
なんにしても、今は怪物たちを倒さなければならない。
やがて俺たちは校庭へと出る。
そこでは、英樹さんと翔が背中合わせで敵を撃退していた。

「英樹さん！翔！」

「遼祐さん！？」

「なんでここにいるんだ！」

「すいません！でも、俺は……」

「俺が連れてきたんです」

瀬光紅が冷静すぎるくらいに言う。
それを聞くと、二人とも顔を合わせると、俺を見る。

「……戦えるのか？」

「……分かりません」

正直、ここまでこれたのはほとんど瀬光紅のおかげかもしれない。
確かに、俺は命のやり取りなんかやった事ない。
むしろ、そんな事経験してる方がどうかしてる。

……でも、それでも。

「でも、俺は……嫌なんです。
自分はただ指くわえて。みんなは命がけで戦ってるのに。
それなら、俺だって命を賭けます」

「……それで、いいんだな？」

英樹さんが、改めて俺の意思を確認する。
その目は真剣だ。ふざけて聞いている様な感じではなかった。
瞳の奥の意思を感じ取り、俺は静かに頷く。

「よし、凌。お前は翔と一緒に裏口へ行ってくれ」

「分かりました。行くぞ、翔」

「はい！」

二人は銃を構えて、回れ右をするとそのまま裏口の方へ走っていった。
残された俺たちは、互いに背中合わせになる。
……これも、感じた事がある。
この人とは、初めて会った感じがしない。
何度も何度も。しかも、平和な世界でいっしょに遊んだ様な、そんな感じもする。

――何やってんすか、英樹さん？誰かと待ち合わせっすか？

――ああ、梓とな。

「……行くぞ」

「……ええ！」

俺はまず、目の前の怪物を撃った。
眉間を撃ち抜かれて、緑色の血が吹き出る。
それがグロテスクだったが、気にしてる暇なんてない。
次々と怪物たちを撃ち倒していく。
一方、後ろでは凄い爆発音ばかり響いていた。
そういえば、英樹さんはなんの武器を？
グレネードランチャー？手榴弾？
後ろを振り向く。

パチン！

……指パッチン。と言えばいいだろうか。
それをしたと同時に、近くの怪物がいる場所が爆発する。
これは、なんだ。
魔法？おいおい、何でもありかここは。

「そんな事、言ってる暇は無いぞ」

「分かってますよ！」
絶え間なく、爆発と銃声は鳴り続けた。

やがて、この辺りから怪物の姿は無くなった。
拳銃を降ろし、一息つく。
後ろを振り向いて、英樹さんと顔を合わせる。

「……中々だったな」

「へへ……ガンシュー得意ですから」

……それだけな訳がない。
何か、もっと……何度も何度もこういう経験をしたんだ俺は。
でもなんで？そんな記憶はない……はずだ。

「ところで、英樹さんのあの魔法みたいなの、なんなんですか？」

「ああ、あれは――」

その直後だった。
校門付近で戦っていた、唯と梓がこちらにやってくる。
……やばい、怒られる。

「英樹さん、ご苦労様です」

「梓も。怪我は無いか？」

「はい」

……こっちの会話を聞いていたかった。
でも、唯の視線がそれを許してくれなかった。

「……なんで、いるの？」

「……ごめん。でも、俺は……」

「……分かってる。りょうくんが、ここに来るって事ぐらい」

「悪い」

「……でも、嫌なんだ」

嫌？
何がだ。

「もう、失いたくないから……りょうくんを」

「どういうことだよ、それ」

「……唯先輩。本当の事を言いましょう」

「……うん」

本当の事……？

「りょうくん……落ち着いて聞いてね」

「あ、ああ……」

「りょうくんは、死んでるんだよ。1年前に」

言葉を失った。
衝撃が走った。
まるで後頭部をバットで殴られた様なそんな感じ。
でも、訳が分からない。どういうことなんだいったい……？

「全ての始まりは、1年前の……ちょうどこの日だな」

この時期って、今何月なんですか。

「8月7日。あの日、世界が崩壊した」

俺は、英樹さんと翔と梓に車庫でドリンクを飲みながら全ての事を聞く事にした。
唯は今、作戦会議だそうだ。他の所にいる戦線の分隊と通信会議中らしい。

「世界が崩壊……？」

「ええ。怪物が、この街から現れたんです」

「怪物って……。あの？」

あの緑色の不気味なカエル。
全ては奴の仕業らしい。

「夕方ごろでした。突然街の方に、あいつが大量に現れて……」

「そして、この街はやがて崩壊。そこから広がる様に、世界中も崩壊していった」

……この街から怪物が？なんでそんな事に……。

「世界人口は崩壊する前と比べて１０００分の１に減少し、国のトップたちは重役だけでも安全な場所に避難させようと、宇宙ステーション開発を急がせた。
だが、その計画も世界が崩壊していくにつれて中止した」

トップたちも死んだのか……。

「俺たちは、怪物たちから人々を守るために、生きていくために、この戦線を作ったんです」

「……そうだったのか」

「一番最初は唯先輩だけだったんですけどね」

なるほど。
……で、いつのまにかこんなに大きくなったと。
「ああ。怪物の巣窟だったこの桜が丘高校を奪還したのも、唯だ」
「一人で、戦ったんですか？」
「……そのようだ」
あいつ、いつのまにあんなに強く……。
でも、確かに大きな剣二本持ってばっさばっさ切り刻んでたし、確実に強いのは分かっていた。
だけど……。
「……そして唯は仲間を探して、戦線を大きくしていった」
「それがいつのまにかこんなになったと」
「そう言う事です。ちなみに、律先輩たちもいますよ」
「そっか。みんな無事だったんだな……」
……俺以外。
「……じゃあ、教えてもらおうか。なんで俺が生きてんのか。死んだってどういうことなんだ」
「……正直、分からないです」

「だよなあ」

梓が弱気にそう言うので、溜息をつく。
だけど、さっき聞いた話では、俺は唯の身代わりになって死んだんだと言う。
でも、そんな記憶もないし、傷を治した痕もない。

「……でも、先輩はどう見ても先輩です」

「俺も変わってるつもりなんてねえよ」

やっと笑った。
ここに来て、初めてちゃんとした笑顔を見た気がする。
と、その直後。

『灘宮副隊長、春藤さん、中野さん、日暮さん。至急、リーダー室までお越しください』

スピーカーからアナウンスが聞こえた。
リーダー室に行けという事は、唯が俺たちに用があるのだろう。
俺たちはすぐさま、唯のいるであろうリーダー室へと向かった。

リーダー室へ着くと、唯は机に座って俺たちを待っていた。
俺たちがドアを開けて部屋の中央に来ると同時に、机から降りて幼さを残すその顔に似つかわしくない表情で口を開いた。

「ちょっとまずい事になったの」

「まずい事……？」

「りっちゃんたちからの連絡がないの」

りっちゃんって……あのりっちゃんだよな？
ちょっと自信無さげにいうと、唯は首を縦に振る。

「うん。りっちゃんたちは、この世界をこんなふうにした奴らの情報を集めてるんだけど……」

こんな風にした奴ら……。
やっぱり、これは人の手による仕業だったんだな。

「数時間前から、連絡が全くないし、繋がらないの」

「通信機の故障の可能性は？」

英樹さんが言うが、唯は今度は首を横に振る。

「ううん、通信機そのものは繋がるけど、誰も出ないの」

「そう言う事か。……奴らに勘付かれたか」

「奴らって、世界をこんなふうにした……？」

「りょうくんには、まだ奴らの事話してなかったね。
……英樹さん、この後わたし達はりっちゃんたちの拠点へと向かうから、その時にりょうくんに説明してあげてくれませんか？」

「分かった」

……なんだろうなあ。
俺の目の前にいる唯は、本当に唯なのか。
そりゃあ、確かに今世界は大変な状況だし、へらへらしてるわけにはいかないんだろうけど。
そうだよな、俺がおかしいんだ。
こうして、俺たちは律達の拠点へと向かう事に。

拠点へ行く車の中。
弾薬や物資を積んだトラックの運転席には英樹さんが、助手席に俺が座っていた。
その車内は、非常に変な空気だった。
俺が喋らないだけか、英樹さんが喋りたがらないだけか。
なんにしろ、気まずい感じなのは事実だった。
……英樹さん、早くその『奴ら』の事、聞かせてくだせえ。

「……遼祐」

「おお、やっと喋った」

「何か言ったか？」

「い、いえ。……で、なんすか」

「唯が言ってた、奴らの事だ」

俺は静かに英樹さんの顔を見る。
当の本人は車を運転しているため、前を見ているが。

フリーデン。
それが奴らの名前だった。
基本的に、奴ら自身は姿を現す事は無い。
姿を現すのは、奴らの作った怪物。そう、俺たちが倒しているあの怪物。
それを作っているのが奴らで、これを世にばらまいたのも奴ら。

「フリーデンって確かどっかで……」

「薬品企業だ。『元』な」

やっぱりそうだ。
でも、なんだってそいつらがそんな事を？

「そこまではまだ分からない。ただ、奴らが怪物を作っているのは事実だ」

「なんで、そう言いきれるんですか？」

「怪物の体を調べると、奴らのシンボルマークが彫り込まれていた。

仮にばらまいたりしていない可能性もあるが、何らかの関係性がある事は事実だ」

そりゃそうだ。

……でも、奴らはそんな事をして何のメリットがあるんだよ？

「さあな……。正直、奴らが考えている事は俺たち戦線もよく分からないんだ」

「……そりゃそうだな」

それを、今から確かめに行くんだよな……。

窓に寄りかかり、すっかり変わった桜が丘の風景をボーっと眺めていた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0889w/

けいおん! LOVE!LOVE!LIVE!EXシナリオ-BULETT OF CRISIS-ANOTHER EDITIO

2011年11月13日07時56分発行